

特別寄稿

私の臨床的, 脳波学的研究

川崎医科大学 小児科学教室

梶谷 喬

(平成11年6月23日受理)

My Clinical and Electroencephalographic Study

Takashi KAJITANI

Department of Pediatrics, Kawasaki Hospital,

Kawasaki Medical School,

Okayama, 700-8505, Japan

(Received on June 23, 1999)

概 要

私は川崎医科大学附属川崎病院へ就職してから定年退職するまでの約35年間に, 臨床的, 脳波学的研究を継続して行い, ある程度の成果を上げることができた。どのようにして, 私が臨床に直結した研究, 脳波学的研究を行ってきたか, その軌跡を具体的に記し, 私の熱性けいれん, 小児てんかん, 臨床脳波などに関する主要な研究業績, 即ち学会発表とくに国際学会での発表, 論文とくに英文の論文について報告した。病院に勤務する臨床医にとって, 専門分野を開拓し, それを積極的に学会で発表し, 論文で公表することが重要であることを強調した。

Abstract

I have carried out a clinical and electroencephalographic study continuously at the department of pediatrics, Kawasaki Hospital, Kawasaki Medical School during the period of 1964 to 1999 and I feel satisfaction, because some useful results were obtained. I reported how to carry out a clinical and electroencephalographic study and described the results of my main study on febrile convulsions, childhood epilepsies, clinical EEG etc. This paper also deals with my presentations at the scientific meetings, especially international meetings and my published papers, especially English papers. Finally, I consider it essential that physicians working at the hospital should have their own special fields, preselect their clinical study at the scientific meetings and publish the papers of their study.

1. はじめに

私が川崎医科大学附属川崎病院(以下, 川崎病院と略す)に就職したのは, 1964年8月であるから, 1999年3月の定年退職まで約35年間勤務したことになる。1970年9月に川崎医科大学助教授(小児科学), 1975年11月に同教授に就任した。この35年間, 私は小児科患者の診療に全

力をあげ、1993年4月に病院長になってからも1週間に5日間外来診察を行い、2日間病棟の総廻診を行ってきた。川崎病院のような私的病院では沢山の患者を診て、診療成績をあげ、収入増をはかることがいうまでもなく大切であるが、それだけでは不十分であって、診療に直結した研究を行い、これにより診療の質をあげ、診療密度を高めることが肝要である。その研究成果を関連ある学会で発表し、あるいは論文に書いて公表すれば、あの医師はああいうことを専門にしているのだということが周辺の医師に知れるようになり、紹介患者も次第に増加してくる。私はこの35年の間、救急患者の多い川崎病院の利点を生かして、熱性けいれん、小児てんかんなど小児のけいれん性疾患を中心に臨床的、脳波学的研究を積み重ね、ある程度の成果をあげることができたと思っている。今回は私がどのようにして、研究を行ってきたかその軌跡を具体的に記し、これが後に続く後輩の医師達に少しでも刺激になり、お役に立つことを願っている。

2. 主要な研究

1) 学会発表

私は臨床研究の第1歩は患者の子細且つ正確な観察から始まると思っている。先ず、予診を的確に聴取し、理学的所見をとり、必要な検査を行い、臨床診断をつける。これは日常の診療で行われている極くあたりまえのことであるが、とくにこれと思う貴重な症例、学問的に興味ある症例に遭遇した時には、その患者が入院あるいは外来通院している間に関連ある文献を検索して、これを読み、学会へ発表できるだけの必要且つ充分な諸検査を行い、最善の治療を行わなければならない。患者が退院したり、転医したりしてから、あの検査もしておけばよかった、この検査も必要であったということがないようにしなければならない。私は川崎病院小児科で1人医長として働いた期間が6年間足らずあり、その間ただがむしやりに診療を行い、時には失敗もやったが、若い時代に多くの貴重な臨床経験を積むことができたことに感謝している。しかし、1人でやっていると、診療が知らず知らずのうちに画一的となり、マンネリ化して、とかく進歩がない。日進月歩の医学にとり残されないようにするため、私はできるだけ症例報告や臨床的観察を学会で発表するように努めた。そして学会で発表したことは、できるだけ早く忘れないうちに論文にまとめて学術雑誌に投稿するようにした。大勢の経験豊かな諸先輩の前で口演したり、論文にまとめて専門誌に発表したりするためには、ある程度、国内だけでなく外国の文献を読んで勉強しておかなければ恥をかくことになる。学会や論文に発表することで、私は自分自身を叱咤激励してきた。大事なことは、いつも気軽な気持ちで発表し、書くことだと思う。何かまとまった立派なことを発表してやろう、すぐれた論文を書いてやろうなどと考えては、いつまでたっても何もできない。私は興味ある症例に遭遇したときや、学会発表できそうな演題名を思いついたときには、忘れないうちに外来診察室の机の上においてある用紙に番号をつけて書きとめておき、学会発表したり、論文に書いたりした後は、その項目を鉛筆で抹消するようしていた。こうすると、現在まだ発表していない症例や臨床研究

が一目で分かり、更に積極的にこれをおし進めようという計画と意欲が湧いてくる。

また、脳波検査を行った場合には、その脳波を先入観なく、丁寧に判読し、所見をカルテと脳波の1頁目に添附するだけでなく、別に脳波検査のノートを作り、そのノートに検査年月日、患者のカルテ番号、氏名、年齢、病名と可成り詳しい脳波所見を記した。この脳波記録ノートはある疾患の脳波所見をまとめたり、ある特殊な脳波々型を示す症例を集めたりするのに大変役立った。

私が川崎病院小児科へ就職した1964年8月から、退職した1999年3月までに私自身が発表した国内の学会の一般演題が136題、シンポジウムが4題、特別講演が24題、国際学会での発表が4題あった¹⁾。これには共同演者が発表したものは含まれていない。演題の内容については論文の内容と大体同じであり、後述するのでここでは触れないことにする。4回の国際学会での発表は色々苦勞もあり、得る所も多かったので、これから国際学会で発表される方々の為に、少し詳しく述べることにする。

2) 国際学会

(1) Three Pairs of Monozygotic Twins with Rolandic Discharges

(ローランド発射を示した1卵性双生児の3組)

T. Kajitani, M. Nakamura, K. Ueoka and S. Kobuchi

Epilepsy International Symposium 1978

この国際てんかん学会はカナダのバンクーバーで1978年の9月10日～14日に開催され、British Columbia大学のJ. A. Wada教授が会長をつとめられた。この時に私は上記の演題で双方とも脳波上にローランド発射(Rolandic Discharges, 以下RDと略す)を示した1卵性双生児の3組を報告し、双生児の双方において臨床発作型は必ずしも一致をみず、RDには遺伝因子の関与が強く示唆され、恐らくそれは常染色体優性に遺伝し、年齢依存性浸透率を示すこと、RDの臨床症状は画一的でなく、可成りの多様性があることを述べた²⁾³⁾。発表後、何人かの外国人から質問を受けたが、質問の内容がどうであったか記憶に残っていない。ただ口演発表をおえた後、エレベーターの中でばったり座長をしてくれたアメリカ・ミネソタのDr. R. J. Gumitと会ったとき、彼が「あなたの発表は大変よかった。」とほめてくれて、嬉しくなったことだけを憶えている。

この国際学会は会長が日本人になじみ深いJ. A. Wada教授であったためか、日本人の参加者が多く、私も日本人の近鉄観光ツアーに入れてもらった。このツアーには秋元波留夫東京大学精神神経科名誉教授をはじめ、東京医科歯科大学精神科の島菌安雄教授、福島県立医科大学精神科の熊代永教授、東京都神経科学総合研究所の鈴木二郎先生、虎の門病院臨床生理検査部の江部充先生、名古屋市でてんかんの専門診療をしておられる田所靖男先生、横浜市でてんかんの専門診療所原クリニックを開業しておられる原實先生等、日本のてんかん学会をリードする錚々たる顔ぶれがそろっており、日本の学会では話をする事のないこれらの人々と気軽にお話ができ、親しくなることができた。一番の収穫は、この学会の期間中ずっとホテルが同室

であった大阪医科大学神経精神科の西浦信博講師と中心・側頭部に焦点性棘波をもつ小児の良性てんかんやRDについて、色々と議論したこと、学会場のホテル Bayshore Inn のロビーでこの方面での先駆者であるフランスの Dr. M. Beaussart とこの小児の良性てんかんについて話し合いができたことであった。西浦先生とは学会のあと、バンクーバーのフレイザービュー・ゴルフコースで一緒にプレーをし、ひきつづいてバンフへ行き、カナディアンロッキー、ルイズ湖の氷河等を見ることができ、カナダの自然の雄大さ、美しさを満喫することができた。

これが縁で、帰国してから西浦先生と私の2人が世話人となり、RD(Centro-temporal EEG foci)研究会が発足し、1983年2月に第1回が新大阪チサンホテルで開催された。以後1998年2月の第14回研究会まで、殆ど毎年大阪と東京で交互に開かれ、少人数ながら活発な討論が行われ、極めて有意義で楽しい研究会であった⁴⁾。

(2) Clinical and Electroencephalographic Characteristics of Midline Spikes in Children

(小児の正中線部棘波の臨床的、脳波学的特徴)

T. Kajitani, T. Kimura and N. Sengoku

1989 Annual Meeting of the American Epilepsy Society

1989年度アメリカてんかん学会は1989年12月3日～6日にボストンの Westin ホテルで開かれ、小児期発症のてんかんがテーマの1つであった。学会の第1日目に American Epilepsy Society Annual Course の Update on Childhood Epilepsy (小児てんかんの現在) と題する教育講演がアメリカとカナダの小児てんかん学者8人により行われ、日本では聞くことのできない最新の知見が披露され、これだけでもこのアメリカてんかん学会へわざわざ出かけてきた甲斐があったと感じた。なかでも New York の Albert Einstein 医科大学の神経科、小児科の S. Shinner 教授による Prognosis of Childhood Seizures (小児のてんかん発作の予後) の講演には共感する所が多かった。彼は抗てんかん剤による治療について、長期間に亘る抗てんかん剤治療の副作用が次第に明らかになるにつれ、治療は早期中止の方向へ著しく移行しつつあることを述べたが、私が平素ひそかに思っていたことを喋ってくれて、まさに我が意を得たりという満足した気分となった。

私がこの学会へ演題を出す気になったのは、会長の J. A. Wada 教授から私宛に「貴兄の Midline Spikes に関する研究は興味深いので、是非この学会で発表して欲しい。」という手紙がきたからである。恐らく J. A. Wada 教授は私が Brain Dev. 10巻5号、1988年に発表した上記と同じ題名の英文抄録か、臨床脳波31(2): 92-96、1989に掲載された私どもの論文「Midline Spikes を示す小児の臨床的、脳波的検討」⁵⁾のいずれかを御覧になり、私にわざわざ声をかけて下さったものと思われる。この時の私の発表は午後の poster session で、懇親会と平行して行われた為、アルコールが適当に入っていて、質問に対しても脳波や図表を指さしながら比較的スムーズに答えることができた。

発表の要旨は過去10年間に当科で脳波検査を行った小児の中で、Midline Spikes を認めた40例について臨床的、脳波的に検討した結果を報告したもので、本棘波は痙攣惹起性が高く、全

身性強直間代発作を示すものが多いこと、大部分はRDと同じように年齢依存性で機能的、素因性のものであるが、一部は大脳皮質の mesial あるいは paramedian の器質的障害によるものであることを述べた⁵⁾。

ボストンは緯度からいうと北海道の旭川位だそうであるが、当時強い寒波がアメリカ東海岸を広く覆っていたので、外気温は氷点下17°Cになっていた。道路には霰のような小さい氷の塊りが散在しており、その上を歩くとぱりぱり音がして、滑りそうになった。10分以上歩いていると、顔が痛くなり、鼻水も凍ってしまった。温暖な気候の岡山へずっと住んでいる私にとって、生まれてはじめての体験であった。同じホテルに宿泊していた西浦先生御夫妻と一緒に、ホテルのレストランで食べた本場のロブスターの味は格別であった。また、シンフォニーホールでアイザック・スターン、ヨーヨーマ等によるブラームスのピアノ四重奏曲の熱演を聴いて、久し振りに身震いするような興奮を憶えた。

(3) Relationship between Benign Epilepsy of Children with Centro-Temporal EEG Foci and Febrile Convulsions

(中心～側頭部に脳波焦点をもつ小児の良性てんかんと熱性けいれんとの関係)

T. Kajitani, T. Kimura, M. Sumita, M. Kaneko and Y. Kusaka

The Joint Convention of the 5th International Child Neurology Congress and the 3rd Asian and Oceanian Congress of Child Neurology

この小児神経学の国際学会は1990年11月4日～9日に東京女子医大小児科教授の福山幸夫会長ののもとで東京新宿の京王プラザホテルにおいて開催された。私は上記の演題を口演発表した。このセッションの座長はデンマークの I. Thorn 女史と私がつとめた。この演題で我々は、Benign Epilepsy of Children with Centro-Temporal EEG Foci (以下 BECCT と略す) 100名と年齢、性別が対応している非てんかん児100名について、熱性けいれんの既往歴と家族歴(第3度近親者以内)を比較した結果、BECCT では対照に比べて既往歴(18% : 8%)、家族歴(48% : 21%)ともに有意に高率であったこと、同胞の一方が BECCT を示し、他方が熱性けいれんを示した14組のうち、7組の脳波検査を施行し、これら7組の同胞全員に RD を認めたことを報告し、これらの観察から BECCT と熱性けいれんとの間に遺伝的関係があることを強調したのである⁶⁾。この発表が済んで、スライドを返却してもらいにスライド受付へ立ち寄ったところ、カナダの西オンタリオ大学の Dr. W. T. Blume が脳波をもう一度よく見せてくれと行ってやってきたので、スライドの試写場で再度写して見てもらった。彼は8歳4ヶ月の BECCT の姉と7歳4ヶ月の熱性けいれんの既往をもつ弟の双方に RD が出現している脳波を電極の配置など確かめながら熱心に見て、よく分かった、有難うと礼をいって立ち去った。

この学会で私にはもう一つの大役があった。それは Symposium II-C Febrile Convulsion and Its Outcome (熱性けいれんとその転帰)の座長をアルゼンチンのブエノスアイレスの Dr. Natalio Fejerman と一緒につとめることであった。このシンポジウムでは、先ず座長の N. Fejerman がまえおきとしてこのシンポジウムの意義について述べ、2番目にフランス・パリの

J. Aicardi が熱性けいれんの定義と鑑別診断, 3番目にアメリカ・ベセスダ NIH の K. B. Nelson 女史が熱性けいれんの自然歴, 4番目にイギリス・カーディフにあるウェールズ大学病院の S. J. Wallace 女史が熱性けいれんの既往と関連あるてんかん症候群, 最後にアメリカ・ボストンの N. P. Rosman 教授が熱性けいれんの管理とその後発現するてんかんへの影響をそれぞれ講演し, 活発な討論がなされた。午前10時から正午までの約2時間, 私は殆ど何も喋らずに座長席に座っていたが, これはまさに緊張の連続であり, 可成りの苦痛であった。N. Fejerman が「Dr. Kajitani 何か喋ることはないか?」といわれたので, 私は熱性けいれんの児の脳波を追跡的に検査していると, 3歳を過ぎてから全般性棘徐波や RD のような焦点性棘波が出現するようになるが, これらのてんかん様脳波異常は熱性けいれんの再発やてんかんへの進展を予知するものでないこと, 熱性けいれんが発現する時期とこれらのてんかん様発射が出現する時期との間に時間的なずれがあること, てんかん様発射を指標に熱性けいれんの治療をすべきでないことなどを述べ, こちらの事実は臨床的に重要であることを強調した。

(4) The EEG in Febrile Seizures (熱性けいれんの脳波)

T. Kajitani

Course on Febrile Seizures, International School of Neuroscience, San Servolo, Venice

この熱性けいれんに関する国際神経学会議は1992年の6月18日, 19日の2日間, イタリア・ベニスのサンサーボロ島で開かれた。前の年の1991年の春にアメリカの NIH の K. B. Nelson 女史から, 1992年6月にベニスで国際神経学会議の熱性けいれんのコースが開催される予定であるが, その会に演者として出席してくれないか, という依頼の手紙が届いた。思い悩んだ末, 行く決心をし, この国際会議に出席した。上記の演題でスライドを用いて20分間英語で口演し, その後10分間の質疑応答, 討論を行った。講演の要旨は, 熱性けいれんの発作時脳波, 発作直後から約1週間までの急性期脳波, 発作後の経時的, 追跡的脳波, 熱性けいれん患者の同胞の脳波, 熱性けいれんと小児欠伸てんかん, BECCT との関係, 熱性けいれん患者におけるてんかん様脳波異常の意義等について, 自験例の脳波を供覧しながら説明した。この詳細については, 川崎医科大学で1999年1月20日に最終講義として講演し, 先日, 川崎医学会誌に掲載されたので, 関心のある方はそれを御覧いただきたい⁷⁸⁾。この会に招かれた演者はアメリカ, イギリス, カナダ等世界各国からの計11名で, すべて熱性けいれんに関する専門家ばかりであったが, 日本人は私だけで, 大げさにいえば私は日本代表ということであった。私の英語も参加者によく理解してもらえたようで, 無事大役を果たすことができた。会議の第1日目の晩に, 私共招待された演者と座長が主催者のローマ大学の小児神経科の Curatolo 教授らにより, サンマルコ広場の近くにあるシーフード・レストランに招かれて, 地中海のシーフードを御馳走になった。ひらめ, 海老, 蟹, しゃこ, かき, あさりなど, 瀬戸内海でとれる魚貝類と大差なかったが, ワインはさすがに美味しかった。

このベニスの国際会議には私の家内も一緒に行き, 二人でベニス以外の都市, ローマ, フィ

レンツェ、ナポリ、ボンベイ等を観光し、明かるく、陽気で、大食のイタリア人と接することができた。なかでも、フィレンツェの街はルネッサンスの頃の雰囲気そのまま残しており、アルノ川、ウフィツィ美術館の名画とともに忘れ得ぬ思い出となった。演者として招待されたため、日本からイタリア・ベニスまでの往復の旅費とベニス宿泊のホテル代が事務局から支払われ、大いに助かった。

私は欧米へ留学した経験が全くなく、英語を読んだり、書いたりすることはある程度できるが、喋ったり、聞いたりすることは苦手であった。このたびの国際学会での発表にあたっては、HESCO 社から発売されている「国際学会・会議のためのハンドブック——英語による上手なプレゼンテーション——」が大変役に立った。

3) 論文発表

1964年8月から1999年3月までの川崎病院小児科在職中に私が書いた学術論文の数は、邦文135編（うち単著59編，筆頭著者76編），英文27編（うち単著3編，筆頭著者24編）であり，他に学位請求の指導論文が3人6編ある¹⁾。また，教科書，単行書の分担執筆が32項目（うち単著が30，筆頭著者が2項目）ある。邦文，英文の学術論文162編を，その内容から分類してみると表1のようになる。すなわち小児てんかんに関するものが40編で最も多く，次いで熱性けいれんが37編，脳波に関するものが34編，その他の神経疾患が22編，麻疹等のウイルス感染症が6編，抗てんかん剤に関するものが5編，腸重積，乳児嘔吐下痢症など消化器疾患が4編，その他となっている。教科書，単行書の分担執筆32項目のうちわけは，熱性けいれんに関するものが6，小児てんかんに関するものが5，脳波に関するものが1，その他の神経疾患が15項目で，圧倒的に小児神経学に関するものが多く，他は小児新生物が2項目となっている。

表1 私が執筆した学術論文の内容

小児てんかん	40編	アナフィラキシー様紫斑病	3編
熱性けいれん	37 "	細菌感染症	3 "
脳波	34 "	循環器疾患	2 "
その他の神経疾患	22 "	血液疾患	2 "
ウイルス感染症	6 "	アレルギー疾患	2 "
抗てんかん剤	5 "	その他	2 "
消化器疾患	4 "		
		計	162編

表2 私が分担執筆した教科書，単行書の内容

熱性けいれん	6項目
小児てんかん	5 "
脳波	2 "
その他の神経疾患	15 "
小児の新生物	2 "
栄養障害	1 "
小児科総論	1 "
計	32項目

私が書いた英語の論文のうち，代表的な“Febrile Convulsions and Rolandic Discharges”（熱性けいれんとローランド発射）Brain Dev. 3(4): 351-360, 1981⁹⁾に対して20ヶ国，69人の各国の研究者から別刷の請求があった。国別にみると，アメリカ26人，チェコスロバキア7人，西ドイツ6人，スペイン4人，カナダ，フランス，イタリア各3人，デンマーク，オランダ，ハンガリー，メキシコ各2人，その他であった。この論文の要旨は，脳波上にRDを示した熱性けいれんの既往のある39名の小児と同じくRDを示した熱性けいれんが先行したてんかん児23名を臨床的，脳波的に評価し，更に同一家系の2人以上がRDを示した10家系を検討した結

果, RDを示す熱性けいれんと小児の良性ローランドてんかんとの間には遺伝的に密接な関係があること, RDを示す熱性けいれんは熱性けいれんの中で, 特異な subtype を構成することを強調したものである。

もう一つの論文 “Relationship between Benign Epilepsy of Children with Centrotemporal EEG Foci and Febrile Convulsions” (中心～側頭部脳波焦点をもつ良性小児てんかんと熱性けいれんとの関係) Brain Dev. 14(4): 230-234, 1992⁹⁾ に対しては10数ヵ国, 27人の研究者から別刷請求があった。アメリカ8人, 西ドイツ5人, ハンガリー3人, スペイン2人, フランス, オーストリア, チェコスロバキア, ポーランド, トルコ, 香港各1人, その他であった。この論文の要旨については, すでに国際学会の項で述べているので省略する。

これら2編の論文と “Three Pairs of Monozygotic Twins with Rolandic Discharges” (ローランド発射を示した1卵性双生児の3組) in Advances in Epileptology: The Xth Epilepsy International Symposium, edited by J. A. Wada and J. K. Penry, Raven Press, New York, p171-175, 1980.²⁾の論文は, 有難いことに英語の単行書や論文に何回か引用されている。すなわち, 単行書では1983年に F. E. Dreifuss が編集した “Pediatric Epileptology. Classification and Management of Seizures in the Child.” (小児てんかん学, 小児のけいれん発作の分類と管理) John Wright / PSG, Boston, 1983. の中で, アメリカ NIH の K. B. Nelson と J. H. Ellenberg 著の Febrile Seizures (熱性けいれん) の章, フランスの有名な小児てんかん学者であり, 神経学の大家である J. Aicardi の著書 “Epilepsy in Children.” (小児のてんかん) Raven Press, New York, 1986. の中の Febrile Convulsions (熱性けいれん) の章, アメリカ・クリーブランドの神経学者 H. Lüders and R. P. Lesser 編の “Epilepsy: Electroclinical Syndromes” (てんかん: 脳波, 臨床症候群) Springer Verlag, New York, 1987. の中の Benign Focal Epilepsy of Childhood (小児の良性焦点性てんかん) の章, イギリスのてんかん学者 S. Wallace 女史が編集した “Epilepsy in Children” (小児のてんかん) Chapman & Hall Medical, London, 1996. の中で彼女自身が執筆した Febrile seizures (熱性けいれん) の章に引用されている。

また, 論文では私が尊敬している西ドイツの小児てんかん学者 H. Doose と W. K. Baier の共著 “Benign partial epilepsy and related conditions: multifactorial pathogenesis with hereditary impairment of brain maturation.” (良性部分てんかんと関連ある状態: 脳成熟の遺伝的障害を伴った多因子病因) Eur. J. Pediatr. 149: 152-158, 1989. 同じく H. Doose らによる “Children with benign focal sharp waves in the EEG — developmental disorders and epilepsy.” (脳波上に良性焦点性鋭波を示す小児——発達障害とてんかん) Neuropediatrics 27: 227-241, 1996. 同じく H. Doose らによる “Children with focal sharp waves: clinical and genetic aspects.” (焦点性鋭波をもつ小児: 臨床的, 遺伝的見解) Epilepsia 38(7): 788-796, 1997. で引用されている。また, イギリスのオクスフォード大学精神科の G. Stores 著 “When does an EEG contribute to the management of febrile seizures?” (熱性けいれん

の管理に脳波が貢献するのは何時か?) Arch. Dis. Child. 66:554-557, 1991. とユーゴスラヴィア・スコピエの N. Sofijanov や NIH の K. B. Nelson らによる “Febrile seizures: clinical characteristics and initial EEG.” (熱性けいれん：臨床特徴と初回脳波) Epilepsia 33(1):52-57, 1992. に引用されている。私の目に触れたのはこれ位であるが、このように外国人の書いた著書や論文に引用されたことは、自分の書いた論文が外国人にも理解され、評価されたことになり、その後の研究に大きな励みになった。

自分の所属する専門学会で発表し、学会雑誌その他の学術雑誌に投稿して論文が掲載されるようになると、次第に講演依頼や雑誌や教科書への執筆依頼がくるようになった。このような依頼があった時は、少々忙しくても断わずに承諾し、期限内に原稿を書くように努力した。如何に多忙であっても、何とか暇をみつけて講演の準備をしたり、原稿を書いたりすることは必ずできるものである。医者も芸者と同じであって、お座敷がかかった時に断わっていると、そのうちお呼びがかからなくなり、淋しい思いをするようになるであろう。

3. おわりに

毎日、患者の診療に当たっている臨床医、とくに病院に勤務する臨床医にとって、臨床に直結した研究を診療と平行して行うことは、日進月歩の医学に遅れをとらない為にも、診療の質を上げ、診療内容を充実させる為にも、紹介患者を増やす為にも極めて重要なことである。自分が平素行っている診療内容を学会で発表し、学術論文として公表することは、その医師の生き甲斐となり、診療の励みとなる。日本語で書かれた論文は、それが如何にすぐれたものであっても、同じような研究をしている外国の医学者の眼には触れず、埋もれてしまう。そういう意味で、医学論文も日本語だけでなく、国際語である英語で書いて公表する習慣を身につけることが望まれる。

文 献

- 1) 川崎医科大学附属川崎病院小児科教室，同同門会：梶谷 喬教授退官記念業績集。西尾総合印刷，岡山，1999。
- 2) Kajitani, T., Nakamura, M., Ueoka, K. and Kobuchi, S.: Three pairs of monozygotic twins with rolandic discharges. in Advances in Epileptology: The Xth Epilepsy International Symposium, edited by J. A. Wada and J. K. Penry. Raven Press, New York, p171-175, 1980.
- 3) 梶谷 喬，中村 誠，上岡清隆，小淵聖子：双方とも脳波に Rolandic Discharges を示した 1 卵性双生児の 3 組。小児科臨床 33：2139-2145, 1980。
- 4) 梶谷 喬：第14回 RD (Centro-temporal EEG foci) 研究会報告。脳波と筋電図 26：262-263, 1998。
- 5) 梶谷 喬，木村敬文，仙石宣彦，藤井直夫，和田映子：Midline Spikes を示す小児の臨床的、脳波的検討。臨床脳波 31：92-96, 1989。
- 6) Kajitani, T., Kimura, T., Sumita, M., Kaneko, M. and Kusaka, Y.: Relationship between benign epilepsy of children with centro-temporal EEG foci and febrile convulsions. Brain

Dev. 14: 230-234, 1992.

- 7) 梶谷 喬: 脳波. 福山幸夫編: 熱性けいれん——最近の考え方——. 東京, 日本小児医事出版社, p51-73, 1991.
- 8) 梶谷 喬: 最終講義 熱性けいれんの諸問題——とくに脳波の意義について——. 川崎医学会誌 25: 125-132, 1999.
- 9) Kajitani, T., Ueoka, K., Nakamura, M. and Kumanomidou, Y.: Febrile convulsions and rolandic discharges. Brain Dev. 3: 351-359, 1981.